

## 連続講演会とマンネリ化

橋本 明

いきなり不穏なタイトルと思われるかもしれない。「マンネリ化」にはふたつの意味がある。ひとつは、昨年、そして一昨年の『生涯発達研究』の巻頭言に引きつづき、またもや当研究所主催の連続講演会をこの場でとりあげていることである。とはいえ、これは『生涯発達研究』各号の特集のもとになっている、各年度の連続講演会を俯瞰してもらいたいという要請に応える意義もある。もうひとつは、連続講演会も2018年度で3回目をむかえて、文字通りマンネリ化の萌芽が出るころではないか、という意味である。『生涯発達研究』第9号の巻頭言で述べたように、最初から連続講演会という形式があったわけではなく、偶然の産物である。だが、(テーマを設定し、ふさわしい講師をさがし、講演内容を特集の形で『生涯発達研究』の記事にするという)形式がいったんできあがってしまうと、それはそれで自由な発想を閉じ込めてしまう、いわば檻になりかねない。その点でいえば、今年度の連続講演会は、連続講演会という形式をいい意味で—これも期せずして、なのだろうが—逸脱することになった。

2018年度のテーマは「共生社会の時代を生きる—教育と福祉はどう支援できるのか—」というものである。簡単に3回の連続講演会をふりかえてみたい。第1回は「異文化介護を考える」というタイトルで、2018年9月に名駅のサテライトキャンパスで実施された。TSM(多文化ソーシャル・ムーブメント)、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト、そして愛知県立大学多文化共生研究所との共催事業として行われた。いわゆる講演会ではなく、複数の登壇者によるプレゼンとそれにつづくディスカッションという形がとられた。また、同年10月に長久手キャンパスで行われた第2回の「若者と居場所をつくる—日欧のユースワークの現場より」は従来の講演会形式で行われたが、11月の同じく長久手キャンパスで開催された第3回は、映画『さとにきたらええやん』の上映および監督の講演というプログラムになった。それぞれの詳しい内容は、今号の特集をご覧ください。

いずれにしても、連続講演会という枠を設定しながらも、さまざまな形態や内容を貪欲に盛り込みながら（諸手続きなどでは、事務方にご迷惑をかけたはずだが）、今後も面白そうな発展の余地があると認識したこの1年だった。ただし、連続講演会は生涯発達研究所が行っている事業のほんの一部に過ぎない。わたし自身は今年度で所長という役から外れる。名ばかり所長であれこれいえる身分ではないのだが、新体制のもとで研究所の事業全体が新たな展開をしてくれればと思う。